

プロ野球は阪神ファンのわたし。「どうして?」と聞かれたときは「いつもハラハラ・ドキドキ・ワクワクさせてくれるから」と答えています。強いときは猛烈に強いのですが、「この試合に勝てば首位(ときには優勝)も夢やないデ!」という大事な試合は、たいてい期待を裏切ってくれます。もう何回、いや何十回そんなことが繰り返されたでしょう…。強いのか弱いのかわからず、何度も失敗や挫折を経験するさまは、私たちの人生を暗示するようなチームだからです。

私たちの人生には「浮き・沈み」があるとよく言われます。とくに、希望が叶わなかったときやけが・病気などで精神的、身体的に弱ったとき、失恋したとき…。そんな自分の人生の一時期を「谷」とか、「下り坂」と感じて、「オレ(わたし)、これからどうなるんだろ…」と悩むことがあったと思います。でも私たちには、その試練を共に担ってくださる方がいらっしやいます。

☆ 『^{あと}後にいる者が先になり、先にいる者が後になる』 — 『マタイ』20章1-15節 —

イエスはよく「天の国」に関するたとえ話をしています。きょうは『マタイ』20章の『ぶどう園の労働者のたとえ』を読んでみましょう。

1 「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。2 主人は、一日につき1デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3 また九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4 『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。5 それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6 五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7 彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。

8 夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、1 デナリオンずつ受け取った。10 最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも1 デナリオンずつであった。11 それで、受け取ると、主人に不平を言った。12 『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中を同じ扱いにするとはい。』13 主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと1 デナリオンの約束をしたではないか。14 自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15 自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』16 このように、^{あと}後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

それはないでしょう!!

この箇所をお読みになって、いくつかの疑問をお持ちになったのではないのでしょうか。まず、ぶどう園の主人は夕方5時にまだ仕事が見つからず、広場に残っていた労働者を雇った — という内容。5時にぶどう園に雇われた人々はぶどう園に行く時間を差し引いたら、労働時間終了の6時まで数十分しか仕事ができないのに主人は雇ったのでした。これには、この地方ではぶどうの取り入れ時期のすぐ後に雨期が待っており、大急ぎで収穫しなければならず、とにかく多くの労働者が必要だったという実情がありました。日本流に言えば「猫の手も借りたい忙しさ」がこの時期なわけです。しかし、夕方来た人たちを朝早くから働いていた人たちはどう思ったでしょう。「なんだ、

今頃来て。もうすぐ終わりだぜ」という冷たい視線を向けたかもしれません。あるいは「今からやっても、ろくに金はもらえねえぜ」と蔑みの声を投げつけた人もいたでしょう。

次もおかしな話です。労働時間が終わった後、ぶどう園の主人は監督に『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と指図しました。ふつうに考えれば、朝早くから働いていた者から払ってやるのが当たり前ですよね。暑い中、それこそ汗水たらして働いた人たちですから、早く賃金をいただいて家に帰りたいと思っていたはずですよ。ところが主人は「最後に来た者から支払いなさい」と言ったのです。労働者は百人以上いたでしょう。最初に来た人たちは、長い間待たされることとなります。どう考えても不公平な扱いです。

もっと不公平なのは、長時間働いた人たちと数十分しか働かなかった人たちの賃金と同じだということです。「1デナリオン」とは当時の労働者の一日分の賃金です。この労働者たちの「時給」が仮に「1時間 800円」で、朝早く来た人たちが10時間働いたとすれば「8000円」もらえる計算になります。遅く来て約1時間働いた人たちは「800円」です。差が出て当たり前です。しかし主人はすべての人に「1デナリオン」を与えたのです。今なら非難轟々、経営者は吊るし上げられること必定です。

待ちつづけた人たち

日雇い労働者たちはその日の仕事を得るために早朝から広場に集まり、雇い主を待ちました。でも声が掛かるのは体力的にじょうぶな若者が優先されました。年齢が高かったり、身体がそれほど強くない人たちは広場に取り残されました。第2節に、ぶどう園の主人が9時ごろ広場に行ったら『何もしないで広場に立っている人々がいた』とあります。主人が12時と3時、さらに5時に行っても、まだ雇い主を待ちつづけている人たちがいたのです。彼らは家で待っている家族のために仕事を見つけ、せめて一日分の食べ物を買えるほどのお金をもらえればと願っていたでしょう。あと1時間で一日の仕事が終わるといとき、主人は『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言ってくれました。彼らの喜びはどんなだったでしょう。満面の笑みを浮かべる人。ホッと胸をなでおろす人。涙ぐむ人…。頭を下げ手を合わせて、ぶどう園の主人に感謝の言葉を捧げたにちがいません。そしてぶどう園に行って、働くよろこびを感じながらけんめいに働いたはずですよ。

それぞれの思い — 「ぶどう園の主人」と「先に来た労働者たち」のちがひ

もっとも疑問に思える支払われた賃金の不公平についてみていきましょう。一日中働いた者の賃金と、1時間足らずしか働かなかった者の賃金と同じ「1デナリオン」。もし自分が前者だとすれば彼らと同じように、ぶどう園の主人に対して不平・不満の言葉を投げつけるでしょう。「冗談じゃないよ！俺は一日中、あんたのために働いたんだぞ！」。

そのとき主人は、最初に何と言ったか。まず「友よ」と呼びかけたのです。「友」とは、『①いつも親しく交わっている相手。友人。②志や目的を同じくする人。仲間。同士。』と辞書にあります。自分と相手の関係が「対等」であることを表わしている言葉です。ちなみにこの「友」の英語版は”Listen, friend,”とか”My friend”（「友よ、お聞きなさい」「私の友よ」）、ドイツ語版でも”Mein Freund”（「私の友よ」）となっています。別のドイツ語版では”Mein Lieber”（「私の愛する（大切な）人よ」）とするものもありました。主人は労働者たちを「大切な仲間」と考えていたことがわかります。

労使関係において、労働者は労働力を提供し、使用者はその代価を提供するという「ギブ・アン

ド・テイク」の関係にあります。本来的には「対等な関係」なのですから、お互い「友・仲間」であるはずですが。しかし現代社会では、お金を払う人間の方が強い立場に立っています。「あんたたちを、雇ってやっている」と「あなたに、雇ってもらっている」との両者の意識があります。とくに日本ではその傾向が強いような気がするのですが …。

文句を言われた主人は、「あなたたちと一日1デナリオンで働く約束をしたのだから、受け取って帰りなさい。私はあとから来た者にも同じように支払いたいのだ」と続けます。つまり、「契約違反をしたわけじゃないのだから、受け取ってお帰りなさい」というわけです。一日中働いた人たちは「もう二度と、こいつの所では働くものか」、「このことをみんなに言いふらしてやる」などと怒ったにちがいません。あるいは、「あしたは午後5時まででに広場に行って雇ってもらい、ここで働こう」と、ずる賢い考えをもったかもしれません。

一方、1時間弱しか働かなかった人たちは一日分の賃金をもらえるなどとは考えていなかったはずですが。よろこぶ妻や子供たちの顔を想像し、ぶどう園の主人に心から感謝して「あしたは、きょう思ってもみなかったお金をいただいた分までしっかり働くぞ」と誓った人もいたのではないでしょう。

「待ち望む」こと

この賃金の支払いのたとえ話は、神さまの私たちに対する「愛」をあらわしていると言われます。『神の愛は、人間の働きに対する分配ではなく、神の自由な意志によってわたしたちに与えられるもの』であり、『人間の功績によって獲得するものではなく、恵みとして一方的に与えられる』と船本弘毅氏は書いておられます。

賃金を払うとき、「最後に来た者から払いなさい」と言ったぶどう園の主人は、広場で夕方5時まであきらめることなく立っていたお年寄りや、体力的に弱い人たちの心身の労苦を思いやったからにちがいません。彼らの「さびしさ」や「かなしみ」を知っていたのです。この主人は、決して失望せず待ちつづけ、やっと「声をかけられた」ことに感謝し、その雇い主のために汗を流して働く人たちの律義さ、けんめいに生きる姿を大切にします。そして、『わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。』と、私たち人間は平等でかけがえのない存在であることを、自己中心的で打算的に生きる人たちに訴える人でもあります。

引用箇所の冒頭に、『天の国は次のようにたとえられる。』とありました。天の国とは、このような主人がいる場所なのです。天の国とは『朝から夕方まで、ただ雇われることだけを願って、絶望的な場にありながらも、絶望せずに立っていた労働者たちのように、ただひたすら、神を待っている者が、祝福される場』(三浦綾子氏)なのです。そして、雇ってくれた(=自分のことを心にかけてくれた)主人のために働く者が大切にされる所です。先にぶどう園に来た人たちのように、「俺たちはお前たちとはちがって、労働者としての価値があるんだ」というような顔をして他者を見下す者は、天の国では「先」に立つことはできないのです。「私は誰よりも～の能力があります」、「私はこれだけの業績を上げました」、「私はあの〇〇大学を卒業しました」— そんな「能力・業績・学歴・地位・財産・容姿 …」を誇る者は、天の国では重要視されません。『金持ちが神さまのお取り仕切り(神の国)に入るよりも、駱駝が針孔(針の穴)を潜る(通る)ほうがまだラクダ(易しい)！』(『マルコ』10-25、『ガリラヤのイエシュー』)というイエスの言葉があります。また、『幼い子供らのような素直な心で神さまのお取り仕切り(神の国)を受け入れなければ、それに加わることなどできるものではない』(『ルカ』18-17、同書)ともあります。

杉山^{よしむ}好先生からのメッセージ

これまで何回かご紹介した恩師・杉山^{よしむ}好先生は、無教会主義の集会を主宰されておられました。そこでのお話を中心にまとめた小冊子の名は、『待望』。わたしが養護学校に赴任が決まった後で先生に連絡をとったとき、「子どもたちと一緒に歩んでください」というアドバイスをいただきました（第3回参照）。34年間の教員生活のうち、24年間はさまざまなハンディキャップがある中高生と一緒にでしたが、その中で先生の言葉の深い意味が少しずつわかってきました。

「待つこと」— これこそ教育において最も大切なことであることを杉山先生は指摘なさったのではないかと。そして無言のメッセージとして、それを知るには「イエスに出会いなさいよ」とおっしゃっていたのだと思います。先生が言葉で伝えることをなさらなかったのは、わたし自身が人間としての弱さや罪深さ、教員としての自負心やそれに伴う傲慢さなどに気づき、そんな自分を棄て去るには「イエスに頼るしかない、委ねるしかない」と、「空^{から}の手」でイエスに出会うことを「待ち」「望んで」おられたのだと確信しています。

生命^{いのち}を養う太陽の光をいただいて、水をやり、雑草を抜き、話しかけながら花を育てるように、ゆったり・少しずつ・着実に、一人ひとりの子どもたちが持つ可能性という名の「芽」が出て、世界に一つしかない花が咲くのをいっしょに待つ—。養護学校(特別支援学校)はもちろんのこと、一般学校の子どもたちの教育にも言えるでしょう。ところが今、学校は企業並みの成果主義・能率主義・合理主義に学校間の競争も加わり、それどころではない場になっています。そのせいで、先生方の「月80時間超の残業」が、公立小学校で3割、中学校で6割に及ぶといわれます。これでは近い将来、「学級崩壊」どころか「学校崩壊」につながるでしょう。先生方はもちろん、子どもたち・孫たちが心配です…。

5月6日、タイガースが「奇跡」を起こしました！ 広島に「0-9」とリードされながら、終わってみれば12-9の大逆転勝ち。諦めたらダメなんですね。途中で家路についたファンは口惜しかったでしょうね。「ゲームセット」の聲がかかるまで逆転を信じたファンがいたからこそ手にした勝利です。「いつかは夢を叶えてくれる日が来る」と信じて、たとえ負け続けても、何年も優勝しなくても、応援し続けるファンこそ「ほんもののファン」です。

人生だって同じです。「何をしてもうまくいかない」、「誰にも愛されていない」… などと思い悩むのは本当につらいものです。でも、「今」与えられるものと、「これから」与えられるものがあるのではないのでしょうか。あれもこれもと欲張らないで、「そのとき」を「待つ」こころの余裕が持てれば、ちょっと楽になれるはずです。「私は恵まれていない」のではありません。一人ひとりを大切に思ってくださいる存在がいらっしやいます。「ぶどう園の主人」が！ あなたとともに！

神さま、私たちが「今・このとき」を大切に受け入れ、身のまわりの出来事や他者との交わりの中に、私たちを見つめるあなたの慈^{いつく}しみ深い眼差しに気づくことができますように。

【引用・参考にした書籍など】・大貫 隆 他『岩波 キリスト教辞典』 ・新共同訳『聖書』

- ・船本弘毅 『生きる道しるべ— イエスの譬話』 ・三浦綾子『新約聖書入門』
- ・Martin Luther 『DIE BIBEL (聖書)』 (Württembergische Bibelanstalt(ヴュルテンベルク聖書協会、1968)
- ・DEUTSCHE BIBELGESELLSCHAFT(ドイツ聖書協会) 『GÜTE NACHRICHT NEUES TESTAMENT (新約聖書)』 (1998)
- ・日本聖書協会 『新約聖書 GOOD NEWS NEW TESTAMENT 和英対象』 (2001)
- ・東京新聞 『社説 しわ寄せは子どもに 先生の過重労働』 (2017年5月10日付)
- ・山浦玄嗣 『ガリラヤのイエシュー』 ・松村 明 監修『大辞泉 第二版』 (小学館、2012)